



## アラン・チューリングの残光

村上祐子（東北大学）

アラン・チューリングを記念したチューリング賞は計算科学のノーベル賞とも呼ばれ、Association for Computing Machineryが最高峰の科学技術者に与える賞として1966年に創設した。現在のスポンサーはグーグル社である。

アラン・M・チューリングは、ロンドン生まれ、イギリス人の数学者・論理学者・哲学者・暗号解読者である<sup>1)</sup>。幼少時から自然科学に関心を持ち、ケンブリッジ大学に進学、数学トライポス課程で首席卒業後、プリンストン大学で博士を取得した。チューリング・マシンとよばれるアイディアは、プログラムとデータを共にテープ上に保存・操作する計算概念の基礎モデルである。第二次世界大戦中にはブレッチリー・パークで暗号部隊に所属し、理論的概念だったチューリング・マシンの物理実装に取り組んだ。ボンベと呼ばれる解読器の開発に成功して、ドイツのエニグマ暗号を解読し、Winston Churchillに「単独による業績としては連合軍の勝利への最大の寄与」と称賛された。

第二次世界大戦後には国立計算機研究所・ケンブリッジ大学に所属し、計算機の開発を進めるとともに、応用的な人工知能研究の嚆矢を放つ。特に機械は思考するか？といった現在でも人工知能研究者や哲学者が問い続ける根本的問題に取り組み、チェスを指すコンピュータのアイディアを展開するとともに、人間を模倣する機械を人間と区別できるか？というチューリング・テストを提起した。その後マンチェスター大学で数学・計算機科学の研究推進中、当時違法とされていた同性愛者と発覚し逮捕された。

この事件の一方で研究関心はさらに広大となり、現在の生物学における形態形成<sup>2)</sup>の先駆を構想途

上に41歳で夭折した。死因は不明であるが、青酸カリをしみこませ一口かじった林檎が横に落ちていたとされる。当時違法だった同性愛者と発覚し逮捕、当時同性愛「治療」と考えられていた女性ホルモン投与刑を受けての情緒不安定、機械は思考できるという主張が神への冒瀆であり社会不安を惹起したとの非難、また戦時中の軍事機密を知り得る立場にもかかわらず国内外で不特定多数と親密な関係となったとの推定、その一方での毒物への造詣から、公式には自殺とされながらも、自殺・事故・他殺といった多様な説が語られてきた。

イギリスでは1967年まで同性愛はIndecency（既存規範への反逆）の例として違法とされていたが、ジェンダー多様性受容への社会的要請が高まり、チューリングの恩赦が2009年に提案、2013年12月に承認されて名誉回復が行われた。このような死後の名誉回復はきわめて異例である。

チューリングは幼少時から学校選択・学歴・身なり・行動様式についてdecency（社会的規範に照らして品位を保ち見苦しくないこと）という縛りを強く受け、はみだし者としての自己を制御し続けるという苦行を強いられながら、研究開発を続けていた。もしチューリングが社会規範のしがらみに足を引っ張られなかったとしたら到達できたであろう情報学・形態形成理論の成果には、まだ我々は及んでいないのかもしれない。この死の遠因と推定されるジェンダー差別がどれだけの学術的損失をもたらしたのか、見積もることすら難しい。

規範逸脱者アラン・チューリングの名を冠した賞が最大の名誉とされる計算機科学分野の文化の底流には、ヒッピーのカウンター・カルチャーに見ら

れる反骨精神との共通性があることが指摘されている<sup>3)</sup>。アップル社のロゴは明らかにチューリングを念頭に置いている。階層・ジェンダー・社会的行動などについて、既存の規範を「当たり前」と押し付けてくる同調圧力への反発は、多様な異能者を認める豊かな創造性の土壌とは表裏一体である。

さて日本における計算機科学のコミュニティはどうだろうか？ 紛争が継続する国際社会のあちこちで、構成員の一様性を前提とするホモソーシャルの傾向が強まり、排外的雰囲気が漂う時代を我々は目の当たりにしはじめています。このような時代の中でもチューリングを誇りと思い続けられること自体、先人の努力の成果であることに思いをはせながら、今回の特集を読み進めていきたい。

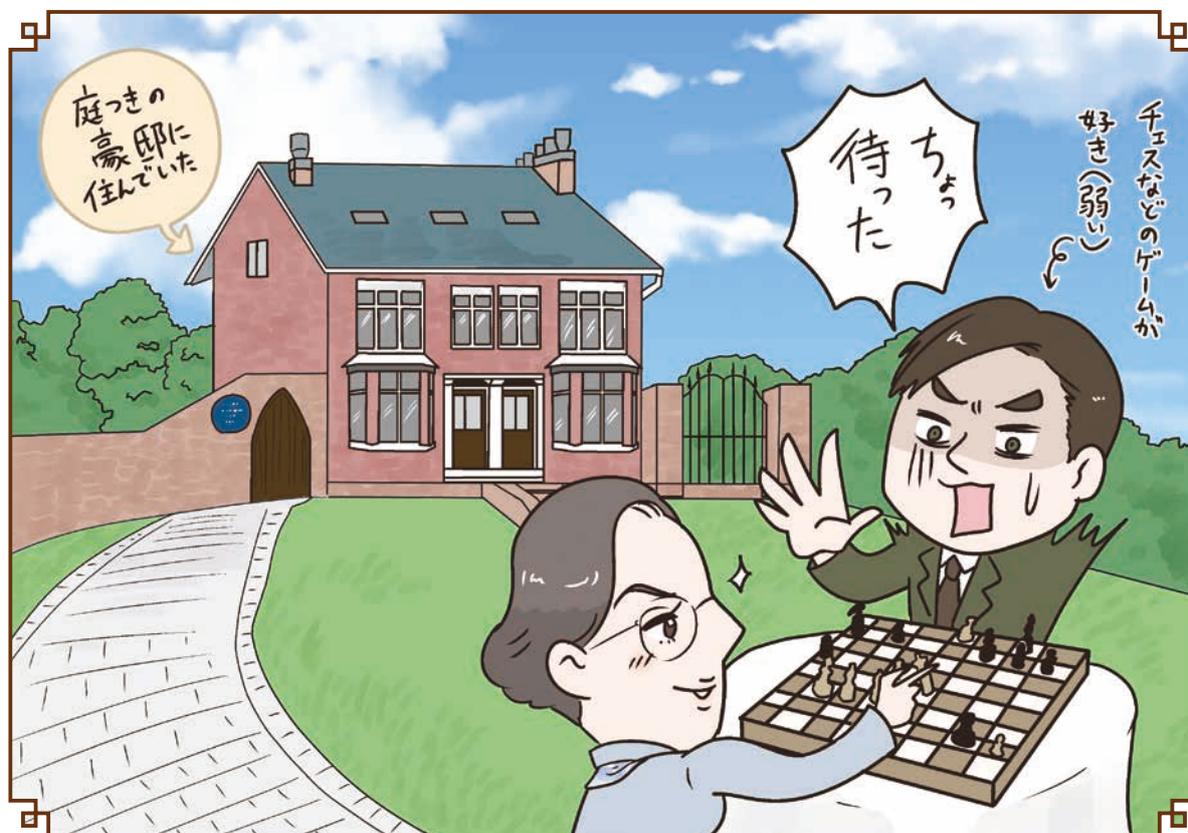
参考文献

- 1) エニグマ：アラン・チューリング伝（上下巻）アンドルー・ホッジス，勁草書房（2015-2016）。
- 2) Turing, A. M. : The Chemical Basis of Morphogenesis. Philosophical Transaction, 237(641) pp.37-72 (1952). doi: 10.1098/rstb.1952.0012
- 3) Turner, F. : From Counterculture to Cyberculture : University of Chicago Press (2006).

(2017年2月11日受付)

村上祐子（正会員） ymurakam@m.tohoku.ac.jp

東北大学大学院文学研究科准教授。情報哲学・情報倫理・科学技術社会論。東京大学教養学部教養学科、同大学院理学研究科、同総合文化研究科を経てインディアナ大学大学院哲学専攻でPh.D.取得。国立情報学研究所特任助教授、東北大学大学院理学研究科准教授を経て現職。



(イラスト：山本ユウカ)